

163. 転出者の故郷における地域活動支援への参加意識に関する研究

- 埼玉県秩父市中宮地町からの転出者を対象として -

A study on transfers' participation consciousness to regional activity support in their hometown
-Case of transfers from Nakamiyaji-cho, Chichibu city, Saitama prefecture-

根岸亮太*・後藤春彦**・田口太郎***・井上由梨*
Oyota NAKAMIHARA Haruhiko OKUCHI Taro TAOKUCHI Yuri INOUE

The depopulation and aging problem is serious in the provinces in recent years. As a result, the management of regional activities including festival becomes difficult in the provinces for the manpower shortage. This study aims to clarify the possibility that transfers become the manpower for regional activities in their hometown. In this study, The following things were clarified 1) Many of transfers have the hope to participate to regional activities in their hometown after their transfer. 2) Many of transfers who have the hope to participate go home well, meet the acquaintances and have the relation to the hometown in the festival. 3) The different point of view to participation of the transfers who have the will to participate the regional activity and who experienced participation is only a chance.

Key Words: Transfers, Regional Activity, Returning Home, Participation Consciousness, Festival
転出者、地域活動、帰省行動、参加意識、祭事

1. はじめに

1-1 研究の背景

高度経済成長以降、人口の都市部流出により地方では人手不足のため祭事を始めとした地域活動の運営が困難になってきている。運営を放棄し祭事の衰退した地方は、独自性を持たない没個性的なまちとなり、まちが持ち得ていた魅力を喪失しかねない。

今後の地方にとって、祭事を始めとした地域活動を維持していく為にも転出者が故郷の地域活動を支援していく体制を整える事が重要である。

1-2 研究の目的

本研究では、埼玉県秩父市中宮地町からの転出者を対象として①転出者の持つ故郷への帰属意識の変化及び地域活動への参加意欲の特徴、②地域活動参加に意欲的な転出者に見られる帰省時の行動の特徴、③地域活動参加経験者の活動参加要因を明らかにする。これにより埼玉県秩父市中宮地町からの転出者による故郷での地域活動支援⁽¹⁾の可能性を示し、転出者が故郷の地域活動支援へ参加するための指針を得ることを目的とする。

1-3 研究の枠組みと方法

2章では対象の選定、対象の概要、及び調査の方法を述べる。3章ではアンケート調査から、転出者の持つ故郷への帰属性及び地域活動への参加意欲の変化の特徴を明らかにする。4章ではアンケート調査から、地域活動参加に意欲的な転出者に見られる帰省時の行動の特徴を明らかにする。5章ではアンケート調査及びヒアリング調査から、活動参加経験者と未経験者との地域活動参加に

対する意識の差異より地域活動参加経験者の活動参加要因を明らかにする。6章では3、4、5章より得られた結果をもとに、転出者が故郷での地域活動支援へ参加していくための指針を示す(図表1 用語の定義

1)。また本研究で用いる用語の定義を示す(表1)。

1-4 研究の位置づけ

本研究は転出者を扱った一連の研究に位置づけられる。

転出者の帰省行動に関する研究として、細田ら¹⁾は地域外家族による帰省行動時の農作業に着目し、農家の年齢分類毎における労働力の特徴と意義を述べている。転出者の地方小都市定住条件に関する研究として、三村ら²⁾は出身者のふるさと回帰意識の構造分析を通じて、Uターン世帯向け住宅施策の在り方を提言している。また片田ら³⁾は住民の転出・帰還行動の行動メカニズムの把握により、それに基づく定住施策の評価手法の開発を行っている。

本研究は参加意識に着目し、転出者が故郷における地域活動の支援に貢献できる可能性を明らかにするという点に特徴がある。

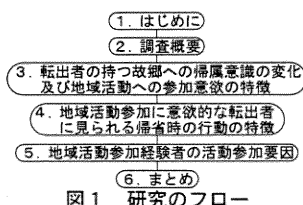
2. 調査概要

2-1 対象の選定

本研究では、10年以上も前より人手不足に陥っている⁽²⁾秩父夜祭⁽³⁾という地域の伝統的な祭事を持つ埼玉県秩父市中宮地町を対象地とし、中宮地町からの転出者のうち現在も町内に家族が居住している者を対象者とする。

2-2 対象の概要

秩父市は、東京都心部から北西約80kmに位置する埼玉県西部の秩父盆地中央部に位置する。近年、基幹産業であったセメント業が衰退したことから、職場、人口とも減



* 正会員 早稲田大学大学院理工学研究科 修士課程 □Graduate Student, Dept. of Architecture, School of Eng., Waseda Univ.)

** 正会員 早稲田大学理工学部建築学科 教授・工博 □Prof., Dept. of Architecture, School of Eng., Waseda Univ., Dr. Eng.)

*** 正会員 早稲田大学理工学部建築学科 助手・工修 □Research Assoc., Dept., of Architecture, School of Eng., Waseda Univ., M. Eng.)

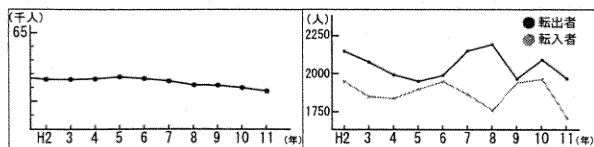


図2 秩父市人口推移

図3 秩父市転出入者数推移

表2 アンケート調査概要

調査期間	2004年10月2日～2004年10月17日
調査方法	調査期間中、中宮地町内の各家庭に対し転出者に関するヒアリング調査。協力を得られた家庭からの転出者へ随時アンケート郵送配布。2004年10月20日を締切りに郵送回収。
配布数	121通
回収数	80通 (66.1%)
有効回答数	76通 (62.8%)

表3 アンケート内容

・年齢	・各県における頻度、理由、行っていること
・性別	・秩父内の『秩父を出る前からの知人』
・秩父を出た時の年齢、理由、気持ち	・秩父内の『秩父を出たあと知り合った知人』
・現在の住んでいるところ	・まちの活動に対する参加意識、理由
・故郷への愛着	・まちの活動への参加経験
	・将来の帰還意識とその理由

少し(図2、図3)⁽⁴⁾、深刻な過疎・高齢化が懸念されている。中宮地町は、市内の中央部に位置する650世帯⁽⁵⁾の住宅地域である。古くは養蚕によって栄え、その頃に建造された秩父夜祭のための宮地屋台や柿沢祭⁽⁶⁾のための傘鉾等を現在も保有しており、それらを守るための保存会も存在している。

2-3 調査方法

本研究では、中宮地町内の全世帯を訪問し、転出者の有無を開き、121人の転出者を把握した上でアンケート調査を実施した。また、後日アンケート回答者のうち協力を得られた数名にヒアリング調査を実施した。アンケート調査の概要及びアンケート内容を示す(表2、表3)。

3. 転出者の持つ故郷への帰属意識の変化及び地域活動への参加意欲の特徴

本章では、転出者の転出・帰還に対する意識から転出者の故郷に対する考えの変化を分析する。

3-1 転出者の属性

属性及び秩父に対する愛着の度合いを示す(図4、図5)。また、転出者の転出先別人数を示す(図6)。

転出先は東京23区や埼玉県の主要都市などが多い。また、秩父に対する愛着について否定的な回答者は一人も見受けられず、中宮地町からの転出者は秩父に対し高い愛着を持っているという事が伺えた。

3-2 転出契機別に見る転出時の年齢・転出意識

秩父からの転出契機は大きく分けて進学、仕事上の都合、結婚という3つの契機に分類できた(図7)。

(1)「進学」を契機とした転出

全員21歳未満と非常に若い時期に転出を行っていた。転出に対する意識は「どちらかと言えば出たかった」「ど

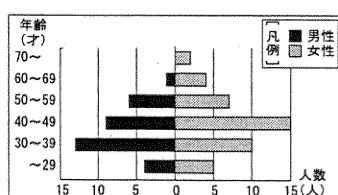


図4 対象者の性別・年齢

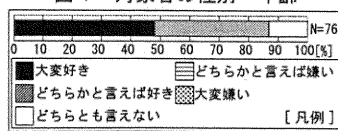


図5 秩父に対する愛着の度合い

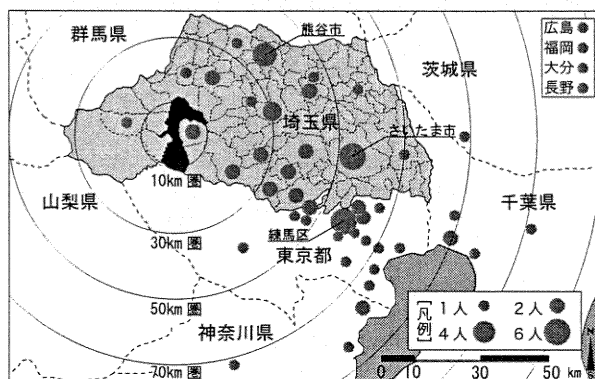


図6 対象者の転出先別人数

ちらとも言えない」が多く見られ、転出に対してやや積極的な意識を持っていた事が伺えた。

(2)「仕事上の都合」を契機とした転出

20歳未満での転出が多いが、21歳以上でも転出は行われていた。転出に対する意識は、20歳以下では「とても出たかった」から「どちらかと言えば出たくなかった」まで平均的に見られた。一方、21歳以上では転出に対する積極的な意識は見られなかった。

(3)「結婚」を契機とした転出

回答者20人中18人が女性であり、大半が20代のうちに転出を行っていた。転出に対する意識は、全体的に「どちらとも言えない」が多いが、20代後半においては転出に対し消極的な意識も見られた。

3-3 転出契機別に見る転出に影響を与える意識の背景

転出意識に関する自由回答より、転出契機別に見られる転出意識に影響を与えている背景を示す(表4)⁽⁷⁾。

(1)「進学」を契機とした転出の意識の背景

積極的転出者には『都会への憧れ』や『新しい生活への期待』が多く見られ、若い年代であるために都会や新生活に対して強い興味を持っていたということが伺える。消極的転出者には『通学できない』という意識要因が特に多く見られた。交通の便の悪い秩父市から大学に行くには、転出することが止むを得ない状況であると言える。

(2)「仕事上の都合」を契機とした転出の意識の背景

転出契機である仕事に対しての意識が強く転出行動に影響を与えていた。積極的転出者は『やりたい仕事がある』

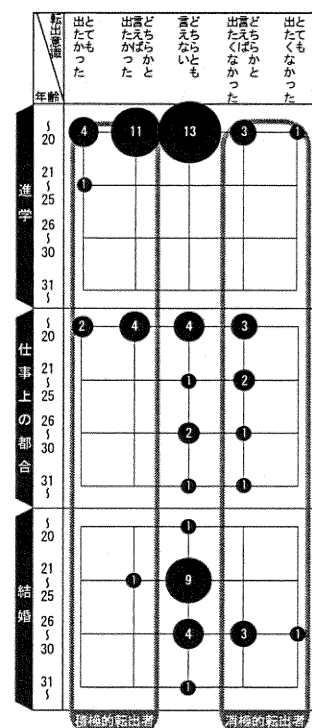


図7 転出契機・年齢別に見る転出意識

表4 転出契機別に見られる転出に関する意識の背景

転出契機	凡例 ○ 積極的要因 △ 中立的要因 × 消極的要因	項目	人数	転出に対する意見
進学	○ 都会への憧れ		6人	年齢的に大都市への憧れ、興味が非常に強かった。遠くのものを見かけた。
	○ 新しい生活への期待		6人	一人暮らしをしてみたかった。新しい土地での生活に期待する気持ち。
	○ 秩父への不満		2人	閉鎖的な土地柄が余り好きでなかった。
	△ 進学のため		9人	当然大学に行くため出たという感じ。
	× 通学できない		14人	進学のため、前々から一度は出るものと思っていた。大学が自宅から通えなかったため。
	× 秩父への愛着		1人	秩父を離れる寂しさ。
仕事上の都合	× 新しい生活への不安		1人	一人暮らしできるのか心配だった。
	○ やりたがい仕事がある		3人	やりたい事が、秩父では不可能なことだった。
	○ 都会への憧れ		4人	東京に憧れていた。
	○ 新しい生活への期待		2人	一人暮らしをしてみたい気持ちもあったので。
	△ 就職の都合		4人	東京に就職したため。
	× 市内に仕事がない		3人	就職した先が寮制だったため。
結婚	× 通勤できない		2人	秩父では仕事がない。
	× 他の土地への不安		1人	会社の命令で出たので自分の意志では無い。
	○ 都会への憧れ		1人	通勤が可能であれば出る事も無かった。
	○ 新しい生活への期待		1人	他の土地に多少不安があった。
	△ 結婚のため		4人	新しい生活が始まる期待もありました。
	△ 相手の都合		4人	秩父から出てみたい気持ちもあった。
結婚	× 秩父への愛着		3人	結婚したためであり、「出たい」「出たくない」とい意識的な転出では無い。
				主人の仕事の関係。

ことで転出を行っており、消極的転出者は『市内に仕事がない』『通勤できない』ことから転出を行っていた。また、積極的転出者には都会や新生活への強い興味も伺える。

(3)「結婚」を契機とした転出の意識の背景

転出者の多くは結婚のみを背景として挙げていた。転出者の多くは『結婚のため』『相手の都合』により転出しており、意識的な転出ではなかったと言える。

3-4 転出者の転出時・現在における居住指向の変化

転出者は転出時には比較的、積極的に都会へと転出を行っていた。しかし、現在では転出者のおよそ半数が、秩父に帰りたという意識を持っている(図8)。転出契機別に見ると、特に進学による転出者において転出時には12.1%であった故郷指向が現在では45.4%にまで上昇している。また、仕事上の都合による転出者、結婚による転出者においても同様に故郷指向が上昇していると言える。

3-5 帰還に影響を与える要因

帰還意識に関する自由回答より、帰還意識毎に帰還に影響を与えている意識の要因を示す(図9)。全体を通して『家族』『仕事』が大きく帰還意識に影響していた。両親の存在が秩父への帰還意識を高めているが、一方で子供の存在、仕事の問題が帰還意識を減衰させている。また、「大変帰りた」を選択した回答者には『故郷』に関するものが見られた。「出来れば帰りた」を選択した回答者は仕事の問題から『老後』における希望として帰還意識を持っている者が多く見られた。帰還拒否者は『転出先』の利便

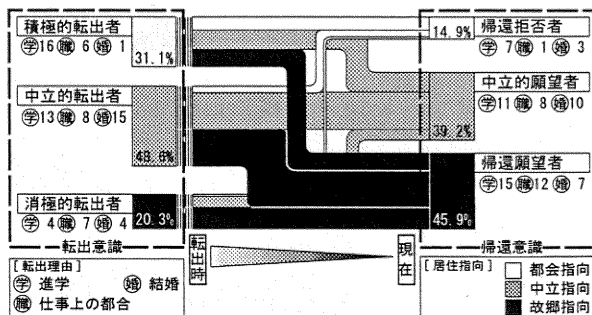


図8 転出者の居住指向の変化
※図中の数字は該当する人数を表す。

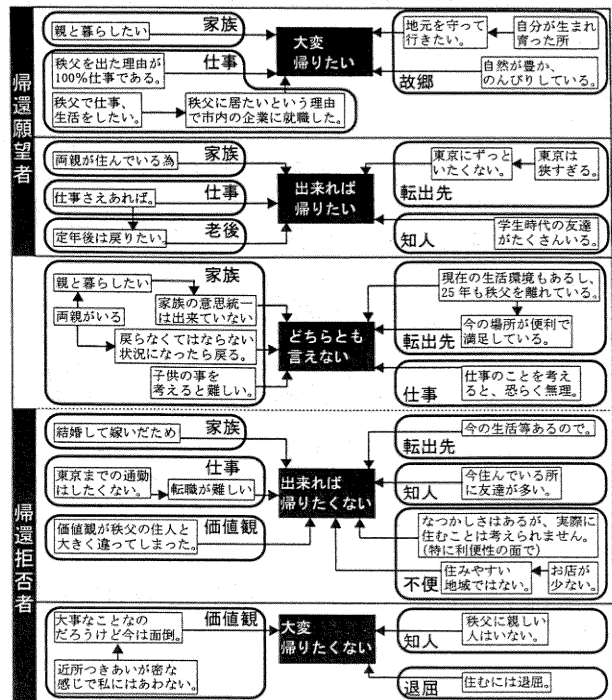


図9 帰還に関する意識の要因

性や秩父への『不満』、都市と田舎との『価値観』の違い等を挙げている。

3-6 転出者の帰還意識と活動への参加意識

転出者のうち帰還願望者は34人(45.9%)見られた(図10)。帰還願望と地域活動への参加意識は相互に高まっていく事が分かる。一方帰還拒否者においても、帰還は困難だが「普段秩父に住んでいないため、積極的に地域行事に関わりた」といった地域活動への参加意識が見られた。

3-7 ライフステージ(8)で見る活動への参加意識

ライフステージと参加意識との関係を見ると子供が生まれると同時に参加意識が高まりその後漸減している事が分かる(図11)。これは「子供の顔見せ」を理由とした帰省をきっかけに故郷への愛着が高まるが、子供の成長とともに故郷との関係が疎遠になること等が関連していると思われる。このことから、子供の成長が故郷に対する意識の

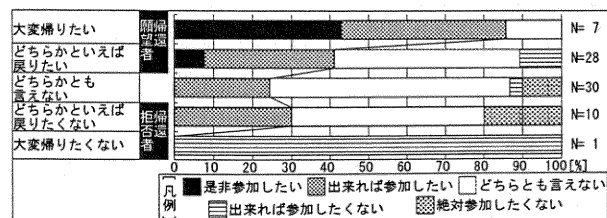


図10 帰還意識別に見る地域活動への参加意識

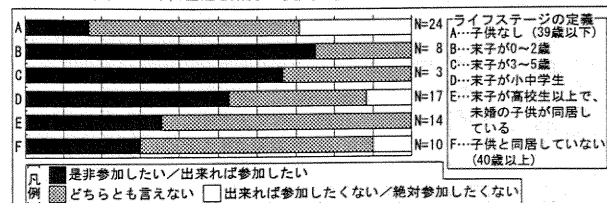


図11 ライフステージ別に見る地域活動への参加意識

変化を起こす要因の一つとなっていると言える。

4. 地域活動参加に意欲的な転出者の帰省時の行動の特徴

本章では、転出者のうち故郷での地域活動に対し積極的な参加意識を有する者（以後、積極的参加意欲者とする）について、帰省頻度及び各帰省時に行う行動より故郷との関わり方の特徴を明らかにする。

4-1 転出者の地域活動に対する参加意識

29名（38.2%）が地域活動への参加に対し積極的な回答をしている（図12）。また、37名（48.6%）は「どちらとも言えない」と回答しており、拒否的な回答は10名（13.2%）しか見られなかった。

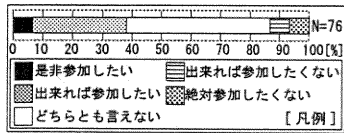


図12 地域活動への参加意識

4-2 帰省日程に見られる特徴

全体及び積極的参加意欲者の年行事及び不定期な帰省での帰省頻度について、それぞれを示す（図13、図14）。

(1) 年行事での帰省に見られる特徴⁽⁹⁾

全体を見ると、正月、盆といった親族間の慣例行事がある時期に高い帰省頻度を示した。積極的参加意欲者に着目すると、全体に比べ帰省頻度が高くなっている。特に秩父夜祭を始めとした地域の祭りや行事、彼岸においてその傾向は顕著である。

(2) 不定期な帰省に見られる特徴

不定期な帰省は、主に「実家に由来する帰省」「知人に由来する帰省」「時間的余裕に由来する帰省」「地域活動に由来する帰省」の4傾向が見られる。積極的参加意欲者では「地域活動に由来する帰省」が若干高まっているが、総じて2者間に大きな違いは見られなかった。

4-3 帰省時における知人との交流

(1) 秩父における知人の人数

転出する前からの知人とは、全体の90%以上の人が今でも交流があると答えている（図15）。積極的参加意欲者

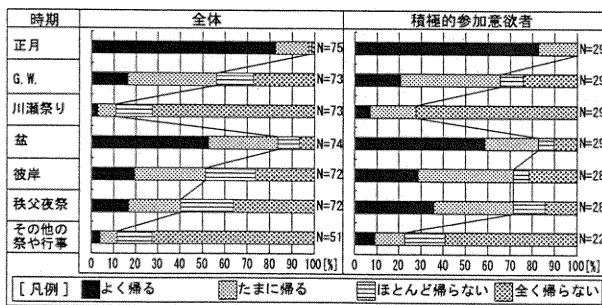


図13 時期別に見る帰省頻度

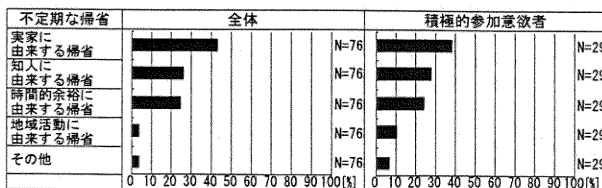


図14 理由別に見る不定期な帰省

は知人の人数はより多くなっている。転出後に知り合った知人が秩父にいた者は40%に満たないが、積極的参加意欲者を見ると10%程高くなっている。

(2) 年行事での帰省時における知人との交流

正月にはおよそ30%の対象者が、またG.W.、盆にはそれぞれ15%近い人が知人と会っている（図16）。積極的参加意欲者に着目すると、それぞれ全体に比べ高い割合を示す中、正月は全体と等しい。正月には、参加意識に関わらず帰省した転出者は知人との交流を行っていることが伺える。一方、秩父夜祭では全体に比べ2倍のおよそ20%が知人と会っている。

4-4 帰省時における地域との交流

全体として各帰省時には地域との交流はあまり行われていないのが現状である（図17）が、秩父夜祭ではおよそ20%の対象者が地域との交流を持っている。積極的参加意欲者は、およそ半数が秩父夜祭で地域との交流を持っている。また、川瀬祭り⁽¹⁰⁾でも地域との交流を持つ割合は高くなっており、地域の祭事が知人との交流の場となっていることが分かる。

5. 地域活動参加経験者の活動参加要因

地域活動への参加経験のある転出者（以後、活動参加経験者）と参加経験の無い積極的参加意欲者（以後、潜在的活動参加者）の地域活動に対する考えを明らかにする事で、地域活動参加への意識の差異を明らかにする。また、転出者、積極的参加意欲者、活動参加経験者、潜在的活動参加者

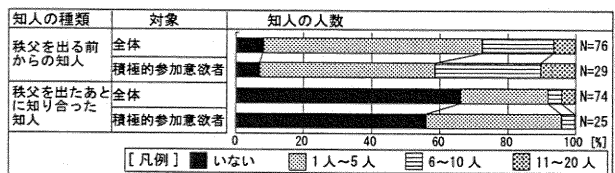


図15 秩父にいたる知人の人数

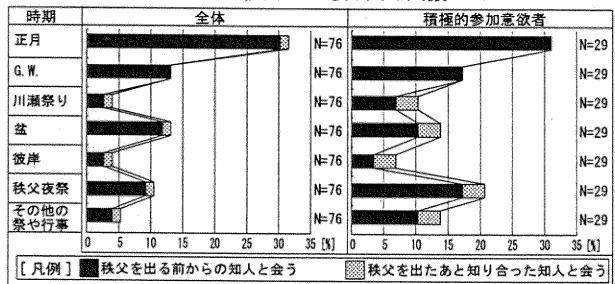


図16 時期別に見る知人との交流

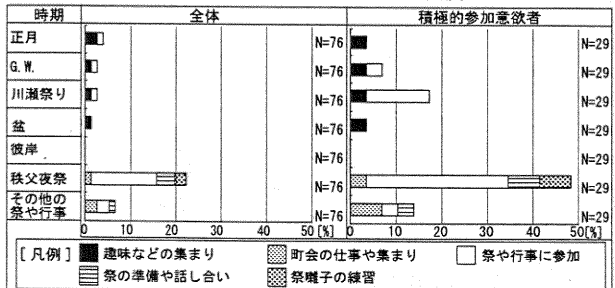


図17 帰省時に見る地域との交流

参加者の4つの分類を整理する(図18)。

5-1 活動参加経験者の概要

(1) 活動参加経験者の属性

地域活動への参加経験者は11人(13.8%)見られた(表5)。主に30代後半～40代前半が多い。このうち男性は8人おり、皆祭に

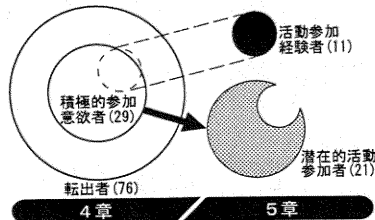


図18 転出者の分類
※()内は人数を表す。

関係する活動に参加している⁽¹¹⁾。女性はそれぞれ個人の興味のある活動に参加している傾向があった。

(2) 活動参加経験者の活動参加へのきっかけ

地域活動へ参加したきっかけを見ると、子供の頃からの地域活動への参加が継続しているものと地元の知人を介して地域活動に参加しているものが見られた。

5-2 地域活動への参加意識を形成する要因

ヒアリング調査により参加意識の形成要因を把握する(図19)。両者に見られる特徴として、故郷への『愛着』に関するものが多く見られる。また、『町の伝統』を挙げている意見も多く見られた。『知人』については様々な傾向の意見が見られた。また、『田舎に戻りたい』ために今のうちから活動に参加し、『帰還』に向け地域との交流を作っておきたいという意見等も見られた。

しかし、活動参加経験者と潜在的活動参加者との活動に対する参加意識の間には大きな差異は見られなかった。

5-3 地域活動への参加に対する要望

活動参加経験者と潜在的活動参加者の地域活動への参加に対する要望を示す(図20)。

(1) 参加したい活動

両者共に、「町会と子供に関するもの」や「地域を盛り上げていくこと」等若干の具体性を持った希望を挙げているが、具体的な活動内容にまでは至っていない。特に潜在的活動参加者は具体的な活動を把握しておらず、漠然と秩

表5 活動参加経験者の参加した地域活動

番号	性別・年齢	活動	参加したきっかけ
1	男 26	中宮地青年部(祭、清掃、行事)	
		中宮地青年部	先輩のすすめで。
		番場町青年部	友達がいって、人手不足のため屋台がひけないので手伝った。
		太鼓	小学校の頃からずっとやっている。
2	男 37	秩父第一小学校ソフトボール	子供の頃にやっており、当時の先輩に誘われて、地域活動のきっかけは子供の頃のソフトボールで始まった。
		飛騨管	21か21の時に自分が作った。もって宮地の人や出た人がみんな祭りに関わっているために、年をとると出づらくなるからそういうのを作っておいてやらないと。
3	男 37	夏祭りの時、市役所の手伝いのボランティア	
4	男 37	中宮地青年部	
		宮地お祭り関連	
5	男 38	中宮地青年部	小2の頃からやっていた。趣味の一つ。
		宮地太鼓保存会	小2の頃からやっていた。趣味の一つ。
6	男 40	秩父夜祭の団体とは、12月には毎年おつきあひがある	知人に誘われた。
7	男 43	中宮地青年部	秩父にいる地元の友達に誘われて。
		氏子青年会	秩父にいる地元の友達に誘われて。
8	男 44	中宮地青年部	秩父祭りのための中宮地祭りが復活したのを契機に7、8年前に結成。その頃はまだ秩父にいて、その時の土台のメンバーにいた。
9	女 39	ワリinger協会	
10	女 52	生協活動	
		演劇鑑賞会	
		語り部会	
11	女 60	ヨガ教室	

父のために活動に参加したいと考えていると言える。また、中には積極的参加意欲者の交流の場となっている秩父夜祭に対する参加の希望が数件見られた。

(2) 参加への展望

全体として『時間的問題』が多く挙げられている。転出地における生活に支障を来さない事が地域活動参加への前提条件となっている。その上で、主に潜在的活動参加者において、参加の『きっかけ』を望む意見が多い。また、地域活動の『情報』を望む声も多い。

6 まとめ

6-1 本研究のまとめ

本研究で得た転出者の秩父に対する意識と秩父との関わり方の現状を示す(図21)。

① 転出者の持つ故郷への帰属意識の変化及び地域活動への参加意欲の特徴

転出者の多くは都会や自活に対する憧れ、仕事・進学上の都合により積極的に転出を行っている。しかし転出期間やライフステージの変化等により、転出後の転出者は故郷

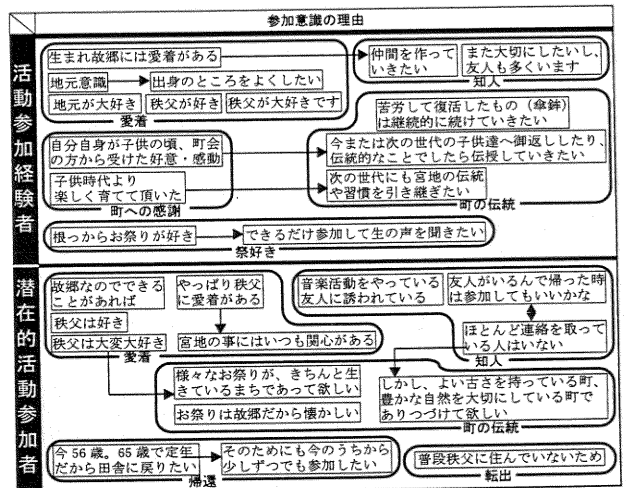


図19 地域活動への参加意識を形成する要因

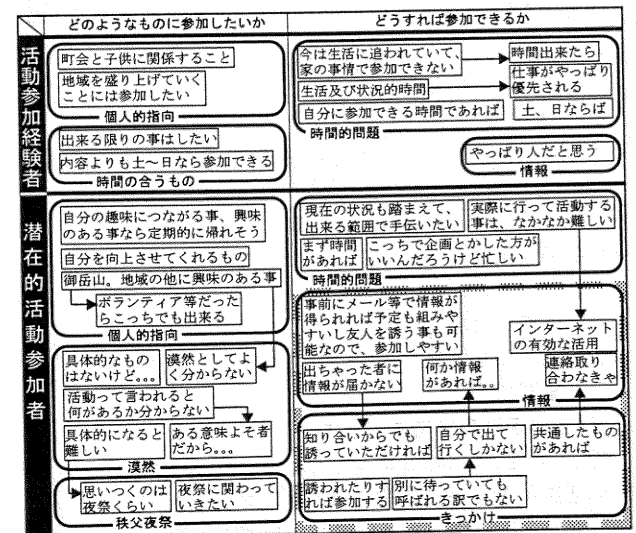


図20 地域活動への参加に対する要望

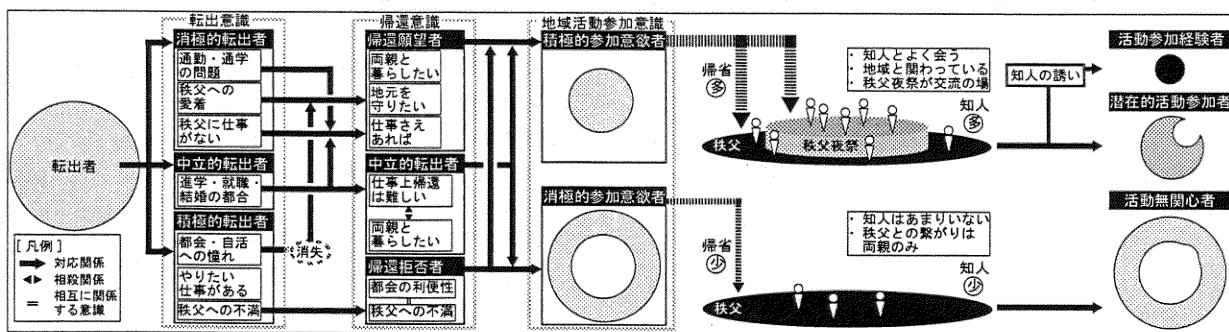


図 21 転出者の秩父に対する意識と秩父との関わり方

に対する帰還意識を持つようになることが多い。このように転出者の故郷への帰属意識は、転出後しばらくの時間を経ることによって高まる。また、そのような高い帰属意識を持つ者の多くは故郷における地域活動への参加意欲を持ち合わせている。

②地域活動参加に意欲的な転出者に見られる帰省時の行動の特徴

積極的参加意欲者は秩父夜祭など地域の独自性が現れている祭事においてよく帰省をし、またその場を介して知人や地域との交流を行っている。

③地域活動参加経験者の活動参加要因

活動参加経験者は具体的活動への参加経験がある一方で潜在的活動参加者は具体的活動を把握していないという差が見られた。また、潜在的活動参加者は地域活動の情報や参加のきっかけを求めている。

6-2 地域活動支援への参加のための指針

1. 転出者に対して

転出者の多くは積極的な意識で転出を行うが、転出先での生活を経て故郷への関心を強める。このように転出者がまちの地域活動に興味を持つには転出後しばらくの時間が必要である。このような転出者を地域と結びつけていくには、転出者が転出後時を経ても気軽に地域との交流を図れるような仕掛けが必要である。具体的には、子供が生まれた時に地域活動への参加意識が高まることから、子供と一緒に秩父夜祭に参加できるといった子供を介した地域との交流が考えられる。

2. 積極的参加意欲者に対して

秩父夜祭は、転出者にとって帰省時における知人や地域との交流の場となっている。このような地域の独自性を持つ祭事を存続させていくとともに祭事への参加の受け口を積極的に作って行く事で、転出者と地元の人間、転出者と転出者の交流が生まれ、そこから他の地域活動への参加のきっかけにも繋がって行くと思われる。また、祭事が転出者にとっての地域や知人とのつながりの場となるためにも幼少期から積極的に地域の子供達を祭事に参加させていくことが重要である。

3. 潜在的活動参加者に対して

潜在的活動参加者は具体的な地域活動を把握しておらず地域活動に対する情報やきっかけを求めていることから、インターネットなどで地域活動の具体的な情報を発信する

とともに故郷の住民や活動参加経験者などが積極的に具体的活動への参加のきっかけをつくっていく事で、潜在的活動参加者は転出地での生活との調整を行った上地域活動に参加する事が可能となるであろう。

■脚注

- (1) 以後、本論文では「地域活動」とは転出者の故郷における地域活動を指す。
- (2) 文献4による。
- (3) 秩父夜祭は毎年12月2～3日にかけて行われ、京都府の祇園祭、岐阜県の高山祭と並ぶ日本三大曳山祭の一つである。
- (4) 文献5による。
- (5) 柿沢祭りは、近年復活した中宮地町の祭りである。
- (6) 文献6による。
- (7) 以後、「とても出なかった」「どちらかと言えば出なかった」と解答した者を積極的転出者、「どちらかと言えば出たくなかった」「とても出たくなかった」と解答した者を消極的転出者とする。
- (8) 文献7の分類を参考にし、ライフステージを区分した。
- (9) 本研究では、正月、ゴールデンウィーク(G.W.)、川瀬祭り、盆、彼岸、秩父夜祭、その他の祭や行事を年中行事として扱う。
- (10) 川瀬祭りは、毎年7月19～20日に市内の中心部で行われる祭である。
- (11) 中宮地青年部は、柿沢祭りを復活させた際に結成された組織であり、柿沢祭りの運営に大きく携わっているため祭りに関係する活動であると言える。

■参考・引用文献

- 1) 細田祥子「中山間地域における地域外家族による農作業の労働力の特徴と意義～長野市信更地区赤田区を事例として～」2003年12月 日本建築学会計画系論文集 NO.574 P.69
- 2) 三村浩史、リムボン、竹植 匡、尹 孝鎮、神吉紀世子「転出時期別類型化された出身者の意識調査から見る地方小都市の定住条件」平成2年度 日本建築学会近畿支部研究報告集 P.633～636
- 3) 片田敏孝、廣島康裕、青島縮次郎「農山村住民の転出・帰還行動における意思決定の構造に関する研究」1989年度 第24回日本都市計画学会学術研究論文集 P.37～42
- 4) 藤澤好一、布野修司、池田利行「地域型住宅研究-秩父-その2 秩父夜祭りに関する建築職人の系譜と機能」昭和59年度 日本建築学会関東支部研究報告集 P.517～520
- 5) 秩父市市勢要覧 P.52～53
- 6) 中宮地町会世帯一覧表(平成15年3月発行)
- 7) 荒井良雄、川口太郎「休日の外出活動に対する家族のライフステージの影響」1992年度 第27回日本都市計画学会学術研究論文集 P.157～162